

社会構造と空間構造 : M. カステルの都市・空間分析の枠組み

豆本, 一茂

<https://doi.org/10.15017/4494288>

出版情報 : 経済学研究. 64 (3/4), pp.75-97, 1998-01-31. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :

社会構造と空間構造

— M.カステルの都市・空間分析の枠組み —

豆 本 一 茂

目 次

- I 本稿の課題
- II 空間と社会
- III 社会構造, 生産様式, 発展様式
- IV 都市的・地域的過程と都市的・地域的構造
- V 結 論

I 本稿の課題

情報化, 国際化, サービス化等の用語をキーワードとして語られる現代世界の複雑でダイナミックな諸動向は, 先進国, 途上国を問わず社会的にも空間的にも大きな変化を生じさせている。このような世界経済の諸変化に呼応して, 欧米の都市社会学や経済地理学では, この新たな動向を読み解くために次々と新たな理論が提起され, 活発な議論が展開されている (松原, 1990, 1995; 友澤, 1995)。それらの代表的な理論としてフリードマンやサッセン (Friedman, 1986; Sassen, 1988)らの世界都市論, シリコンヴァレーのハイテク中小企業群を分析したスコット (Scott, 1988)の新産業空間論, 「第三のイタリア」における中小企業の産業複合体の分析を基にしたピオリ&セーブル (Piore & Sabel, 1984)の柔軟な専門化論などを挙げることができよう。また, フォーディズムの危機とネオフォーディズムへの移行を説くレギュレーション理

論においても, 近年, ジャストインタイム・システムなどの生産形態の変化と絡めながら, 経済地理的領域への適用・応用が試みられている (Leborgne & Lipietz, 1988; Tickell & Peck, 1992; 山田, 1994)。

このような欧米における多様な理論的展開の中でも, 最も興味深い理論を展開している論者として, 1970年代から一貫して都市空間の社会学理論を追求してきた都市社会学者マヌエル・カステル (Manuel Castells) の名を挙げるができる。カステルは, 1960年代後半から70年代にかけて都市問題の深刻化に照応して先進諸国で頻発した都市暴動や都市社会運動に対して有効な分析をなしえなかったシカゴ学派を代表とする伝統的都市社会学を批判し, アルチュセール (Althusser, L.) らの構造主義的マルクス主義理論を基盤として都市社会学の理論的再構築を試みた『都市問題』(Castells, 1977)を1972年に出版し, 一躍「新都市社会学」の理論的旗手となった。その後, 国際的にも大きな広がりを持つようになった「新都市社会学」は, 現在の欧米におけるマルクス主義都市理論の隆盛を支える一因となっており, 我が国でもその中心人物であるカステルの都市・空間理論に関して数多くの紹介とその詳細な検討が行なわれている (西村, 1980; 吉原・岩崎, 1986; 松原, 1988; 吉原, 1994)。

その後もカステルは、積極的に研究活動を展開し現在までに数多くの著書を発表しているが、同時にまた、その研究テーマの設定も含めた理論的内容の変遷が激しいことでも知られている (Lowe, 1986; Saunders, 1986; 吉原, 1994)。多くの論者が指摘するように、『都市問題』を代表とする1970年代初頭から70年代後半に至るまでのカステルの主要な関心は、「都市的なもの (urbain)」を空間的な労働力再生産の集成的単位=集成的消費過程として把握し、この過程、つまり「都市的なもの」への国家介入である「都市計画 (la planification urbaine)」と、これを契機として発生する「都市社会運動」を理論化することに注がれていた。そして、この集成的消費論が、最も批判を受け、数多くの議論を呼んだ点であり、カステルの都市・空間理論を紹介・検討する際には常にこの議論が中心となってきたと言っても過言ではない (Lowe, 1986; Saunders, 1986; 吉原, 1994; 吉見, 1996)。

このような批判に対しカステル自身は、後述するように、自らの集成的消費概念の曖昧さと性急な理論化を試みるあまりの理論的形式主義について自己批判を行い、その後は、1970年代後半から80年代初頭にかけて集成的消費論は中心的テーマから退き、『都市とグラスルーツ』 (Castells, 1983b) では詳細な実証分析を中心に据えた「都市社会運動論」に関心を移していく。さらに80年代後半の『情報都市』 (Castells, 1989) になると、ハイテクノロジーの発展による情報化と先進資本主義諸国における経済的リストラクチャリングを原動力とした都市的・地域的空間の再編過程にその焦点を移行させてきている。

しかしながら、日本の都市社会学、経済地理学では、このようなカステルの変遷に対して、

依然として初期の著書における中心的テーマであった「都市的なもの」と「集成的消費過程」の概念の検討を中心にもっぱら展開されており、我が国におけるカステルの都市・空間理論に対する検討は、1970年代時点での彼の研究成果をめぐる議論に限定されている感がいなめない。このようなことが、個々には高い水準での議論を行いながらも結果として、カステルの都市・空間理論とは結局のところ集成的消費の理論であるとの我が国の斯学における評価を定着させ、実際には多様な側面を持ち集成的消費では語り尽くせない広範な射程を有するカステルの都市・空間理論を限定された形で理解する傾向を生み出していると思われる (吉原・岩崎, 1986; 吉原, 1994)。

また、とくに初期におけるカステルは、アルチュセールによってなされたマルクス主義科学認識論やプーランツァス (Poulantzas, N.) の国家論など、いわゆる構造主義的マルクス主義に依拠していたことが多くの論者によって指摘されている。しかしながら、そのような指摘の一方で、カステルの理論体系を具体的にアルチュセール、あるいはプーランツァスとの関連において把握する試みは十分なかたちでは行われていない。さらに、そのような取り組みが不十分でありながらも、多くの既存の諸研究は、カステル自身の自己批判や中心的テーマの重点の移動を受けて、とくにカステルの1980年代以降の諸研究についてアルチュセール派構造主義の影響が後退、あるいは消滅したと論じており、この種の評価がある程度我が国の都市社会学や経済地理学では定着している (Lowe, 1986; Saunders, 1986; 吉原・岩崎, 1986; 高橋, 1993; 吉原, 1994; 吉見, 1996)。

既存研究においてアルチュセール派構造主義

とカステルの都市・空間理論との関連について詳細な検討を行っているものとしては、その方法論的側面からアルチュセールの科学認識論との関係について検討したサンダース(Saunders, 1986)の研究と、その都市社会運動論の展開と変容について論じたロー(Lowe, 1986)の研究がある。そのなかで両者は、とくに『都市とグラスルーツ』に対する評価の部分で、カステルの「都市社会運動」の規定、国家や階級闘争の位置づけ、またそれらの関係といった理論的内容の変化とともに、そのアルチュセール派構造主義からの切断を重要なポイントとして指摘している(Saunders, 1986, pp. 183-239; Lowe, 1986, 訳 pp. 9-71)。

しかしながら筆者は、取り組まれる直接的な分析対象が非常に多岐にわたり、これに照応するように理論的にも大きな変遷を示すカステルの都市・空間理論には、実際には、その基底に据えられた都市と空間に対する全体的な分析の枠組みが初期の著書からある程度一貫したかたちで存在し、それは近年の諸研究においても維持されている、と考えている。

これは、サンダースやローが指摘するような、カステルの都市・空間理論の内容における転換や、その立場が変化してきていることそれ自体を否定するものではない。しかしながら、これらのカステルの理論的変容やその研究テーマの変遷にしても、それは空間概念や社会構造の理解における一定の強固な基盤の枠内で行われており、そのような都市・空間理論を構築する際の分析の枠組みそのものは依然としてアルチュセール派構造主義によって導かれたものであると言っておきたい。

このような評価の相違は、「アルチュセール派構造主義」そのものをどのように理解するのか、

という問題に関わっている。具体的な内容については第三章以後で論じるが、本稿では暫定的にアルチュセール派構造主義の主要な特徴を、①「実践」概念の転換による「主体」カテゴリーの解体、②矛盾と決定に関する重層的決定の概念、③複合的全体の構造としての社会構造の概念、④歴史的時間の概念の転換、⑤生産様式と社会構成体の概念とその区別であるとしておきたい(Althusser, 1968; Althusser et Balibar, 1968a, 1968b; 今村, 1997)。近年のカステルにアルチュセール主義からの断絶を見る主張の多くは、後述するように、アルチュセール派構造主義に対する理解の不十分さから生起しているように筆者には思われる(Saunders, 1986; 吉原・岩崎, 1986; 高橋, 1993; 吉原, 1994; 吉見, 1996)。

むしろカステルの近年の諸研究を理解する過定で、著者は、アルチュセール派構造主義を前提としてしか、それとは断絶したとされている近年の諸研究を読む(理解する)ことができなかつた。また、とくに近年のカステルの著書は、実証研究部分を重んじるがゆえに、その理論的部分の記述は極度に圧縮された解りにくいものとなっている。我が国の都市社会学、経済地理学の既存の諸研究が、カステルがその研究対象を変えるごとに、その理論的変容を主張し、断絶点を強調するあまり初期の『都市問題』時点での議論との比較検討に終始し、新たに提起された概念や論点については概略的に紹介するに止まっている現状は、このようなことが原因になっていると考えられる。

本論文の課題は、以上の諸点を鑑み、多様な理論的展開を見せるカステルの諸研究を、各時期の主要な著書を中心に検討し、アルチュセール派構造主義の観点からの再解釈を施すことに

よって、その都市・空間理論における全体的な分析の枠組みを抽出し再構成することにある。

筆者は、その断絶点ではなく、むしろ継続しているものに注目することによって、カステルの理論体系をより統一的に把握し、それをもって近年のものも含めた各著書とその体系のなかに位置づけることが、カステルを単なる集合的消費論の一論者に矮小化することなく、その都市・空間理論の真の理解に到達するために必要であると考えられる。

本稿では、厳密な構造主義の立場を遵守していたとされる初期の代表作であり、なによりもカステルの都市・空間理論の出発点である『都市問題』(1977)、構造主義と決別し方法論的にも理論的にも大きな方向転換を行ったと一般には評価されている『都市とグラスルーツ』(1983)、そして情報化や経済的再構造化といった研究テーマとしても以前とは異なる新しい分野に挑戦し、近年の代表作と目される『情報都市』(1989)をその各時期の主要著書として取り上げ検討していくことにしたい。

II 空間と社会

本稿に設定された課題を検討するにあたっては、まず都市理論あるいは空間理論を構築する際の起点となるべき「空間とは何か」という問題から始めるのが妥当であろう。都市あるいは空間を社会科学の観点から分析することは、空間と社会との関係、空間理論と社会理論との関係という問題を必然的に提起せざるをえない。カステルがどのように分析対象である空間と社会を、あるいはそれらの関係を考えているかといった点にまで立ち返り、それらを検討することが、その分析の枠組みそのものの解明に必要

である¹⁾。

カステルは空間理論構築の出発点である「空間とは何か」という問いに対して「空間は、他の物的諸要素—とりわけ、空間（と結合の他の諸要素）に形態、機能、社会的意味を与える歴史的に規定された社会的諸関係にそれ自身入り込む人間—と関連する物的生産物である」(Castells, 1977, p. 152, 1996, p. 411) との規定を行っている。

この定義は、いかなる意味を持つのであろうか。まずカステルは、時間「そのもの」の分析ができないのと同様に、社会と切り離された空間「そのもの」の分析を行うことは不可能であり、時間と空間のない社会は存在せず、またあらゆる社会は空間化されており、逆に社会のない空間もまた存在しないとする。したがって、空間の社会学的分析、つまり《空間の社会学》は、「ある空間において、それゆえ、ある歴史的な複合状況 (conjuncture) において与えられた社会的諸実践の分析にすぎない」(Castells, 1977, p. 489) としている。たとえば、一九世紀という時代についての分析が、単なる時間的区分ではなく、ある特定の時点に存在したある社会の状態や状況についての分析であるのと同様に、空間や地域についての分析は、ある特定の空間に存在する具体的な社会状況の分析なのである。したがって社会的観点からは空間「その

1) 本章の議論は、既存の諸研究では初期カステルの「都市的イデオロギー」論として位置づけられてきたものである(西村, 1980; 吉原, 1994)。しかしながらサンダースが正しく指摘しているように、この初期カステルの都市的イデオロギー論は、本来のアルチュセールの科学認識論と整合しておらず、認識論的側面からなされたこの議論には問題がある(Saunders, 1986, pp. 162-182)。そこで本稿での課題に沿って、ここでは都市的イデオロギー論という文脈からではなく、空間概念の導出という文脈においてこの議論を再構成している。

もの」は存在せず、ただ「歴史的に規定された空間—時間として、社会的諸関係によって構築され、働きかけられ、実践される空間として存在する」(Castells, 1977, p. 489) としている。

これを換言すれば、空間の分析を行うことは、社会の分析を行うことと同義であり、空間は時間と同様に社会から切り離すことは不可能であるがゆえに、空間の理論は、社会構造の理論の科学的用語をもって構成されなければならないということである。それゆえカステルは、空間理論を構築する際には、社会構造の理論のなかに空間を位置づける必要がある、そのような意味で、空間に独自の理論といったものは存在せず、ただ「非常に単純に社会構造の理論の拡張と特殊化が存在する」(Castells, 1977, p. 164) だけでしかないと述べている。

もう一方でカステルは、同じ事柄を「空間は社会の表現 (expression) である」(Castells, 1983b, p. 311) という言葉で定式化している。これは、稠密な居住形態といった都市の物理的な空間的形態が人間の行動様式を規定するというシカゴ学派の生態学的アプローチに基づく伝統的都市社会学の「空間決定論」と、「空間は社会の反映 (reflection) である」とする「反映論」に対する批判から導き出されたものである。

まず「空間決定論」は、「あたかも人間とマウスが交換可能な実験的諸主体であるかのように密度、フリクション、距離といった用語で社会的活動を取り扱う……原始的で物理指向的なアプローチ」(Castells, 1983b, p. 70) であり、カステルはこれを物理的な空間が社会を一義的に決定する「自然決定論」であると批判している。ついで「反映論」については、社会を空間と分離された存在として指し、空間を社会の投影されるもの、あたかも諸集団の行為が書き込ま

れる白紙のページのごとく捉える「文化決定論」²⁾であると批判している。「反映論」は人間の諸活動によって空間が生産されるとの観点から、物理的環境が一義的に社会的諸活動を決定するとした「空間決定論」に対する批判としては有効ではあるが、同時に、社会的諸活動の物的諸条件としての空間が社会的諸活動を規定する側面を見落とし、空間を主意主義的に分析してしまう恐れがある (Castells, 1977, pp. 160-161)。

最初の定義にあるように、確かに、空間は人間の諸活動によって生産されたものではあるが、カステルは空間は社会の反映されたものではないとする。なぜなら「空間は、『社会の反映』ではなく、それは社会である」(Castells, 1983a, p. 4) からである。カステルは史的唯物論の立場からは、「空間は……社会の根本的な物的諸次元の一つであり、それを社会的諸関係から独立したものと考えることは、それらの相互作用を研究する努力を伴うにしても、文化から自然を分離すること、それゆえ、あらゆる社会科学 [= 人間と自然との物質代謝である生産を分析の基軸に据える史的唯物論] の第一原理を破壊することである」(Castells, 1983b, p. 311: [] 内は引用者、以下同じ) として、「物理的、自然的なもの」と「社会的、文化的なもの」、すなわち「空間」と「社会」は社会的観点からは、不可分に統一されているからであるとしている (Castells, 1977, p. 489)。

これらのことを要約するならば、あらゆる空間 (空間的諸形態) は、人間諸活動によって生

2) カステルが「反映論」として具体的な批判の対象としているのは、文化主義としてのウェーバー主義と、歴史主義としてのルフューブルの人間主義的マルクス主義である (Castells, 1977, pp. 160-162)。

産され、それら社会的諸活動を表現する。しかし同時に、この生産された空間(空間的諸形態)がまた社会的諸活動に影響を与え社会を規定する、ということになる。

これらの「空間=物的生産物」、「空間=社会」、「空間=社会の表現」というカステルの空間に関する諸規定は、どのように関連しているのであろうか。これらのことを少し整理してみよう。その場合、空間あるいは空間的諸形態という言葉と、空間が社会を、あるいは社会が空間を規定するという場合の、決定する(déterminer)、または影響・効果を与える(effet)という言葉をどの様に理解するかが鍵となる。

先に規定されたように、空間は、「一つの物的なもの(bien matériel)」(Castells, 1977, p. 488)であり、あらゆる社会的諸実践が空間上において営まれるがゆえに、全ての社会的組織にとって不可欠な要素である。そのような意味でそれは、空間的・地理的環境、景観、地理的諸条件といった物理的な自然環境であり、また同時に「人間によって改良・創出された自然」としての物理的な建造環境や生態学的形態である。このような物理的空間をとりあえず空間①=《空間的-物質形態》と呼ぶとするならば、このような空間は、当然のことながら、その上で行われる社会的諸実践を支えると同時に制約する。しかしながら、この空間が社会を一義的に決定するのではない。なぜなら、そのような物理的なものは、その物理的空間上で営まれるある空間的な形で表現された社会的諸活動が取りうる様々な形態の範囲を限定する(délimite)だけであり、それゆえ同じ物理的空間形態が、歴史的な状況によって規定された社会的諸活動がとる様々な形態にしたがって、多様な社会的効果を生みださうからである(Castells, 1977, p.

489)。

つぎに空間的な形で表現された社会的諸活動、つまりは空間化された社会、社会的空間を、先のものとは区別する意味で空間②=《空間的-社会形態》と便宜上呼ぶとするならば、そこでの空間とは、他のものとは区別されたある独自の種差的(spécifique)な社会形態(社会的組織)であり、歴史的な複合状況によって規定されたある種差的な社会構成体のことを意味している。それはあくまで社会の空間的な現れ・表現であって、空間とは別個に存在する社会が反映・投影されたものではない。空間は、決して白紙のページなどではなく、すでにそこには歴史的に生産された、ある社会形態が存在しているのである。

空間「そのもの」による「社会」の決定、すなわち物理的な空間諸形態による社会的諸形態の直接的な決定は存在しない。しかし、その物理的な空間諸形態上で営まれる社会的諸活動をその物質的諸条件の側面から限定することによって、あるいは物理的空間によって規定された社会的諸活動を媒介として他の社会的諸活動に影響を与えることによって、「ある空間的形態において表現された社会的活動のある効果」(Castells, 1977, p. 489)として「空間」は「社会」を間接的な形で規定する。それゆえ、ある空間と他の空間との関係、ある地域と他の地域との関係とは、それらの空間上に存在しているある社会形態(社会的組織)と他の社会形態との関係に他ならない。

これらのことから、カステルにおいて空間は、《空間的-物質形態》と《空間的-社会形態》という、ある種の二重性を持っている。そしてこの物理的な空間にしても社会的な空間にしても、両者はともに歴史的な社会的諸過程によって生

産された社会的生産物であるという共通点を持っている。したがってカステルのいう空間とは、この《空間的—物質形態》と《空間的—社会形態》の統一概念に他ならない。しかしながら、ここで注意しなければならないのは、物理的な空間は、それを欠いては社会そのものが存在しえないがゆえに社会的な空間に対してより基礎的な位置を占め、歴史的・理論的に先行するものであるが、空間の社会科学的分析において第一義性を持つのは社会的な空間であるということである。この自然的・物理的な空間は、社会的なものとは独立して、それ自身単独で存在しうるものであるが、しかしそのような空間は社会科学の分析対象にはなりえない。なぜなら先に述べられたように、社会から独立した物理的な空間「そのもの」を分析することはそもそも不可能であり、また無意味だからである。この物理的空間を「人間的な関係に包摂」し、社会科学の分析対象として、つまりは社会の構成要素としての性格を付与するのが、他ならぬこの社会的な空間なのである³⁾。それゆえ現実に存在する具体的—物理的空間を社会科学的に分析することは、歴史的に規定された社会的諸関係、つまり《空間的—社会形態》によってその物理的な《空間的—物質形態》に与えられた社会的意味・内容を分析することと同義である。

ここにカステルの中心的テーマの一つである《都市的なもの urbain》の概念が登場してくる理論的な背景があると考えられる。直接的にはこの概念は、ルフェーブール (Lefebvre, H.) によって為された《都市 ville》(=超歴史的な空間

的—物質形態)と《都市的なもの urbain》(=特定の歴史的な社会的内容)の区別を基にして導き出されたものである(西村, 1980; 吉原, 1994)。カステル自身の言葉によれば、《都市的なもの》とは、「歴史的に規定された社会〔=空間的—社会形態〕によって特定の空間的〔—物質〕形態に割り当てられた社会的意味 (meaning)」(Castells, 1983b, p. 302)である⁴⁾。

それゆえ、空間的—物質形態としての都市に社会的内容を割り当てる社会が—その生産様式や歴史的発展段階の相違によって—異なれば、この《都市的なもの》は、また違った社会的意味・内容を持つことになる。たとえば、古代ギリシャでは政治的民主主義の空間的組織であった《都市》が、古代バビロンにおいては宗教的専制権力の物的組織になるといったように、人口や機能の空間的な集中といった空間的—物質形態の社会的な役割は、各々の歴史的な文脈において独特な種差的なものとなる。このようなことからカステルは、《都市的なもの》が歴史時代

4) 多くの論者は、この『都市とグラスルーツ』における《都市的なもの》の規定を、『都市問題』時点での「労働力の集積的再生産 (集積的消費) の単位」とする規定に替わる新たな定義であり、カステルの理論的立場の変更を示すものであると位置づけている(高橋, 1993; 吉原, 1994)。しかしながら、本章で見てきたように、これは初期の『都市問題』時点で設定された空間概念から必然的に導き出される、《都市的なもの》のより一般的な規定であると言えよう。むしろ『都市問題』時点での限定された規定は、サンダースも指摘しているように、都市に現代資本主義社会の主要な矛盾の場を見出し、これを起点とした都市社会運動に社会変革の役割を見出そうとした当時のカステルの政治的立場に影響されたものであると考えられる(Lowe, 1986; Saunders, 1986, p. 226)。

これについては、カステル自身も1975年に書かれた『都市問題』の「あとがき」において、「ある具体的な都市 (あるいは集積や所与の空間的単位) は、単に消費の単位ではない。それは非常に多様な諸実践・諸機能によって構成されている」(Castells, 1977, p. 487)と述べており、初期の段階からすでに「都市的意味の歴史的多様性」が認識されていたことがわかる。

3) このような社会的なものとの自然的・物理的なものの区分と関係性についての議論は、自然的生産諸力を題材とした川島による先進的な研究を参照した(川島, 1952, p. 83-84)。

的・地域的に相違しており独自であること、つまりは「都市化 (urbanism) の社会的意味の歴史的多様性」(Castells, 1983b, p. 70) という結論を引き出している。

以上見てきたように、カステルの都市・空間理論の構築において鍵となっているのは、《空間的一物質形態》に社会的な意味・内容を割り当てる歴史的・地域的に種差的な《空間的—社会形態》であり、そしてこの空間化された社会そのものを解明するための社会構造の理論である。先に述べたように、カステルにおいて都市・空間理論は、空間を分析するために拡張され特殊化された社会構造の理論に他ならない。しかしながら、このことは、空間を社会のなかに、空間理論を社会理論のなかに位置づけることと、従来的一般社会学あるいは一般経済学における社会理論とこの拡張された社会構造の理論が同じであることを意味するわけではない。なぜなら、空間は社会と相互作用のなかで社会そのものに影響を与える一つの物的な社会の構成要素の一つであり、この要素を欠いた一般社会学・経済学はそのままのかたちで空間分析の枠組みとして流用可能なものではないからである。それゆえ、カステルの都市・空間理論の分析の枠組みを明らかにするためには、つぎにこの社会構造の理論を検討しなければならない。

III 社会構造、生産様式、発展様式

カステルの社会構造の理論、史的唯物論の理解は、フランスのアルチュセールとその協力者によってなされたマルクスの構造主義的読解に依拠して、独自に展開されてきたものである。しかしながら、アルチュセールに端を発するこの学派は、その論者の間でも厳密な理論的統一

がなされているわけではなく、必ずしも一枚岩的な学派を形成しているわけではない (Poulantzas, 1968, 1978; 今村, 1997)。また、カステル自身の立場も時とともに微妙に変化してきており、その社会理論は、初期の『都市問題』時点のものと近年の著作とではある程度のズレや強調点の移動が見受けられる (Saunders, 1986, pp. 192-193)。しかしながら、その基本的な社会分析の枠組みは依然としてアルチュセール派構造主義の基本概念が維持されている。それゆえ本章では、一般にアルチュセール派構造主義の先に述べた公約数的な理解を基に、従来の諸研究ではそれらと決別したと評価されている『都市とグラスルーツ』と『情報都市』という近年の著書を中心にカステルの社会構造の理論を検討することにした。

カステルの基本的仮説は、「あらゆる人間的諸過程は生産、経験、権力の諸関係によって決定」(Castells, 1983b, p. 305) され、「諸社会は、歴史的に規定された生産、経験、権力の諸関係によって構築された人間的諸過程の周りに組織される」というものである。生産とは、「生産物を獲得し、不平等な分配方法においてその一部を消費し、社会的に規定された目的にしたがって投資するための剰余を蓄積するために物質を領有・転換する人間の行為」、すなわち人間と自然との物質代謝の過程である。経験とは「欲求と欲望の充足に対する果てしない追求において、生物学的、文化的アイデンティティの多様な諸次元の内での人間自身に対する人間諸主体の行為」であり、自我やパーソナリティといった、いわゆる「主体」そのものを形成・確立するイデオロギー的過程⁵⁾である。そして権力とは、「生産と経験を基盤とした、潜在的あるいは顕在的な暴力の使用によって、ある主体の意思を他

の主体に強要する人間諸主体間の関係」とされている (Castells, 1989, pp. 7-8)。

これらの人間による諸行為は、歴史的に構築された社会的な諸関係、つまり社会的諸構造によって組織化された社会的諸実践である。生産的(経済的)実践、経験的(イデオロギー的)実践、権力的(政治的-法的)実践の各々は、それぞれに対応する社会的諸構造、社会的諸関係において組織化・構造化される。生産は、階級諸関係において組織され、経験は、家族・ジェンダー諸関係⁶⁾において構造化され、権力は、諸主体に対する支配を確実にする国家諸装置における暴力の制度的独占ゆえに国家を基盤として組織化される。(Castells, 1989, p. 8)。それゆえ各々の社会的実践にはそれぞれに独自の種差的な社会構造が対応している。

このような社会観は、アルチュセール派構造主義の社会構造に対する特徴的な理解から引き出されたものである。アルチュセールの議論においては、伝統的マルクス主義理論も含めた社

会科学一般において用いられる「主体による意識的活動」としての「実践(praxis)」、あるいは「理論と実践」という対置において一括して捉えられる「実践一般(pratique en général)」ではなく、現実的に区別されうる異なった、独自の様々な諸実践、すなわち「種差的な諸実践(pratiques spécifique)」が存在するとしている。アルチュセールは「実践(pratique)」を「所与の原材料の所与の生産物への転化の全過程、所与の(生産)手段を用いた所与の人間労働によってなされる転化の全過程」(Althusser, 1968, pp. 167-168)と定義し直すことによって、「実践」概念を根本的な形で転換する⁷⁾。このようにして把握された「実践」は、「主体による意識的活動」としてではなく、科学的概念として限定された客観的現実性をもつ社会的歴史的「過程」として把握されることになる。こうしてアルチュセールは、人間を「主体」というカテゴリーによってではなく、構造における特定の機能を果たすかぎりでの人間、すなわち構造・過程の「担い手(agent/support/träger)」というかたちで把握する(Althusser, 1970; 山本, 1997)。

経済的実践(=生産過程)、政治的実践(=政治的過程)、イデオロギー的実践(=イデオロギー的過程)など多様な諸実践は、現実には相互作用しつつ「社会的実践 pratique sociale」という同じ一つの複合的な全体性に有機的に統合さ

5) 「イデオロギー」という用語は、伝統的なマルクス主義的議論においては、世界に対する歪曲された認識を与えるような階級的世界観や観念としての「表象意識」あるいは「虚偽意識」の意味で用いられている。しかしアルチュセール派構造主義の議論においては、全くと言ってよいほど異なる内容を持つ概念として使用される。アルチュセールの議論においては、イデオロギーは、社会(社会構成体)を構成する局所的構造であり、逆に人間社会は、イデオロギーというこの表象システムがなければ存在しえない。このレベルでのイデオロギーは、それが虚偽であるか真実であるかは重要なことではない。それゆえ、たとえ無階級社会であってもイデオロギーは消滅しないし、人間が社会を構成する限りイデオロギーは存在し続けるとされている(Althusser, 1970, pp. 21-36; 今村, 1997, p. 336-337)。

6) ここでカステルが用いているジェンダー(gender)あるいは性(sexuality)という用語は、フロイト流の精神分析的な意味での「性」であり、日常用語としての「性」が指示するものよりも、幅広い内容を持つように拡張された科学的概念としての「性」である(Althusser et Balibar, 1968b; Castells, 1983b, p. 418, 1989, p. 8)。

7) アルチュセールにしたがえば、経済的実践や政治的実践、イデオロギー的実践だけでなく科学的、理論的な実践もまた存在する。たとえば、政治的実践は、社会関係という原材料を所与の生産物としての新しい社会関係へと転化し、イデオロギー的実践は、宗教的、倫理的、芸術的であれ、人間の「意識」という対象を転化する。そして理論的実践は、「経験的」実践にもとづくイデオロギー的な諸「観念」(原料)を理論的生産手段(理論、方法)を用いて「認識」(科学的な真理、事実)という生産物へと転化する(Althusser, 1968, pp. 167-169; Althusser et Balibar, 1968a, p. 71)。

れてはいるが、それらの分析水準は異なっており、多様な各々の諸実践は、ある単一の実践、たとえば経済的实践といった一つの実践に還元することのできない相対的な自律性や独自性を保持しているとされる (Althusser, 1968, pp. 167-168)。ここから導き出される重要な結論は、経済=下部構造が本質であり、政治やイデオロギーなどの上部構造は単なる表象、すなわち本質としての経済の現れ・現象に過ぎないとする経済決定論、経済還元主義の否定である。しかし、それと同時に、文化や宗教、政治などが経済のあり方そのものを規定するという文化主義や上部構造主義、あるいはこれら複数の諸要因が同等に重要であるとする多元主義もまた否定される。なぜなら、史的唯物論の観点からは、最終的に決定的な実践は「所与の自然(原材料)の有用な生産物への転化という実践」、つまりは生産=経済的实践だからである (Althusser, 1968; Althusser et Balibar, 1968a, 1968b)。

これらのことから社会構造の理論の中心は、必然的に生産過程に置かれることになる。したがってカステルもまた、この生産を基軸として社会構造の理論を展開していく。生産過程において人間は、労働者と生産の組織者(非生産者)に分化し、生産物それ自体は、「再生産(労働力の再生産、生産手段の再生産、社会的諸制度=生産諸関係の再生産)」と「剰余」という二つの主要なカテゴリーに分けられ、さらに剰余は、社会的諸ルールにしたがって消費と投資という二つの主要なカテゴリーに分けられる。ここでカステルは、先の三つの社会諸構造が「剰余の領有 (appropriation) と分配に関する諸ルールを規定することで、生産諸過程と相互作用」し、「これらの諸ルールが生産諸様式 (modes of production) を構成」するとしている。そして、

これらの生産諸様式が生産の社会的諸関係を規定し、さらにこの生産の社会的諸関係が社会的諸階級を規定し、この「剰余が領有される構造的原理が、そのような領有の構造的受益者、すなわち支配階級を指名し、生産様式を特徴づける」(Castells, 1989, p. 9) として生産様式の定義を行っている⁸⁾。

このようにカステルは、生産様式と、それゆえ「生産の社会的諸関係」を定義しているが、分析枠組みを理解するために決定的に重要なもう一つ概念として発展様式 (mode of development) を挙げている。カステルによれば発展様式は、「しばしば生産様式と混同されるが、これは社会的諸関係のもう一つの水準として現れるがゆえに慎重に区別されねばならない。これは労働力、物質、エネルギーが生産物をえるために労働において結合される特定の形態」(Castells, 1983b, p. 306) のことである。これは既存の史的唯物論の理解においては「生産諸力」として理解されているものに対応するが、この発展様式は、特定の生産過程によって生み出される剰余の水準を規定する「生産の技術的諸関係 (technical relationships of production)」(Castells, 1989, p. 10) であると定義されている⁹⁾。この発展様式は、単なる物理的な生産工程

8) カステルはブーランツァスに依拠して、現代社会においては二つの基本的生産様式—資本主義と国家至上主義 (statism)—が存在するとしている (Castells, 1989, p. 9)。いわゆる社会主義諸国における体制を表す国家至上主義的生産様式 (statist mode of production) は、「生産者からの剰余の領有が、暴力と情報諸手段の独占に依存する自己再生産的なエリートによってそれ自体がコントロールされている国家装置の政治的支配を基盤としているようなシステム」(Castells, 1983b, p. 306) であり、資本主義が利潤最大化を指向するのに対して、国家至上主義は、「権力最大化、つまり増大する諸主体それ自体に、彼らの諸意識の深層レベルに割り当てられた諸目的を強制する政治的装置の軍事的能力の増大を指向する」(Castells, 1983b, p. 307) としている。

技術などではなく、ある種の社会的諸関係の一つとして生産様式とはその分析水準が異なるがゆえに区別されるものであり、したがって生産諸様式と、それゆえ生産の社会的諸関係と、発展諸様式と、それゆえ生産の技術的諸関係（または生産諸力）は、「現代社会において相互作用するにも関わらず、重なることはない」（Castells, 1989, p. 11）とされている。

以上のような基本的諸概念をもとに、カステルは、社会は生産様式、発展様式、家族・ジェンダー諸関係、権力諸関係等を組み合わせた歴

史的に種差的な諸関係の複合的な網によって構成されるとしている（Castells, 1989, p. 11）。ここで言う構造とは、分析の枠組み、すなわち現実を認識するための抽象的な理論的道具であり、現実に認識すべき対象は、このような諸構造が歴史的過程によって独自の形で結合された特定の種差的な社会形態、つまりは社会構成体（social formation）である¹⁰⁾（Castells, 1983b, p. 305）。

そのような社会において各諸構造は、相対的な自律性を有し、各々の構造が持つ独自の発展のロジック（リズム）にしたがって進化・発展する。たとえば、生産様式は、発展様式、すなわち生産諸力の発展に機械的に反応して進化・発展するのではない。しかしまた同時に、ある生産力段階を前提とした生産様式は、それだけの生産力を実現しうる発展様式の進化・発展を経ずしては実現されえない。それゆえ生産様式は、発展様式、さらには政治や経験といった他の社会的諸要因との複合的な相互作用関係のなかにおいて規定される。絶対的にではなく、あくまで相対的な自律性を持った各諸構造は、相互に規定しあい、時には他の構造との矛盾・対立をはらみながらも一つの「社会」として機能しうる有機的な統一体、複合的な全体的構造を構成している。このような統一体は、それを構成する各々の構造が独自の発展のロジック（リズム）に従うがゆえに諸構造間の不均等発展を不可避的に伴う。カステルはこのような事態を、「全ての現実的社会、それゆえ全ての社会的形態（たとえば空間）は、複数の生産諸様式の歴史的な分節－節合（articulation）の意味において理解される」（Castells, 1977, p. 165）あるいは「歴史と社会は、経験、生産、権力の分節－節合によって形成される」（Castells, 1983b, p. 306）

9) 生産諸力に対して「生産の技術的諸関係」なる用語を与えたのはアルチュセールである。バリバルは、「アルチュセールは〔生産の社会的諸関係との〕明確な区別を際立たせてくれる『生産の技術的諸関係』という用語を提案している。『関係』〔という用語〕それ自体が社会的性格を含んでいることを思い出してほしい」（Althusser et Balibar, 1968b, p. 140）と述べている。

このような捉え方は、『都市問題』のなかで「〔技術〕は、唯一の要素となるにはほど遠く、生産諸力の総体の一要素にすぎず、生産諸力の総体それ自身は、なによりもまず一つの社会的関係であり、したがって、また労働諸手段の使用の文化的様式を含んでいる」（Castells, 1997, p. 38）と述べているようにカステルにおいては初期から一貫していると考えられるが、これを発展様式として位置づけ生産様式との明確な区別を打ち出すようになるのは1983年ごろからである。カステル自身はこの用語法はトゥレーヌ（Touraine, A.）に依拠するものであると述べている（1983a, 1983b, p. 418）。

10) ここで注意しておかなければならないのは、このことを構造が理論的・抽象的なモデル・概念であり、社会構成体が実在する現実の対象であると解釈すべきではない、ということである。アルチュセールの科学認識論においては、現実に存在するもの＝「具体的－現実的なもの（concret-reel）」すなわち現実的对象と、思考過程において生み出された現実に対する具体的な認識＝「思考における具体的なもの（concret-de-pensé）」すなわち理論的（認識の）対象を厳密に区別している。社会構成体の「概念」は、あくまで理論的実践によって分析の枠組み＝理論的生産手段を用いて生産された現実に対する具体的な認識＝「思考における具体的なもの」であって、「具体的－現実的なもの」＝現実的对象ではない。以後で、社会構成体について、あるいは具体的－現実的なものについて述べる場合は、すべてこの「思考における具体的なもの」であることに注意されたい（Althusser et Balibar, 1968a, pp.9-86）。

と表現している¹¹⁾。

このようなカステルの社会構造分析の枠組みを図式的に表したのが図Iである。社会(社会構成体)とは、複数の構造=水準(niveaux)=審級(instances)¹²⁾の分節-節合からなる複合的システムであり、このシステムは支配的な構造を持つ。先に規定されたように、各々の構造は相互作用しあいながらも相対的自律性を有し、独自の発展のロジック(リズム)を持ち、互いに他の構造の付随的な現象といった形に解消できない独自性を保持しているが(非経済還元主義)、全てのものは不均等発展しているのであるから、このような各構造=要素は互いに等価ではなく、そのうちの一つが支配的な役割を担っ

ている。

ある社会構成体においてどの要素=構造が支配的なものとなるのかは、「最終審級において(en dernière instance)」経済によって決定される(Castells, 1977, p. 165)。たとえば、非資本主義の場合には、社会において支配的な位置を占める構造は経済であるとは限らず、イデオロギーや政治的-法的構造であるかもしれないが、たとえその場合であっても、その非=経済的構造が支配的な構造となることを決定するのはあくまで経済構造である。経済構造(カステルは、生産様式と発展様式の複合的統一体を技術的-経済的パラダイムと呼んでいる)は、ある社会を構成する複数の要素=諸構造のなかの一構造であると同時に、どの構造が支配的になるのかを決定するというパラメーター的な役割を担っている。

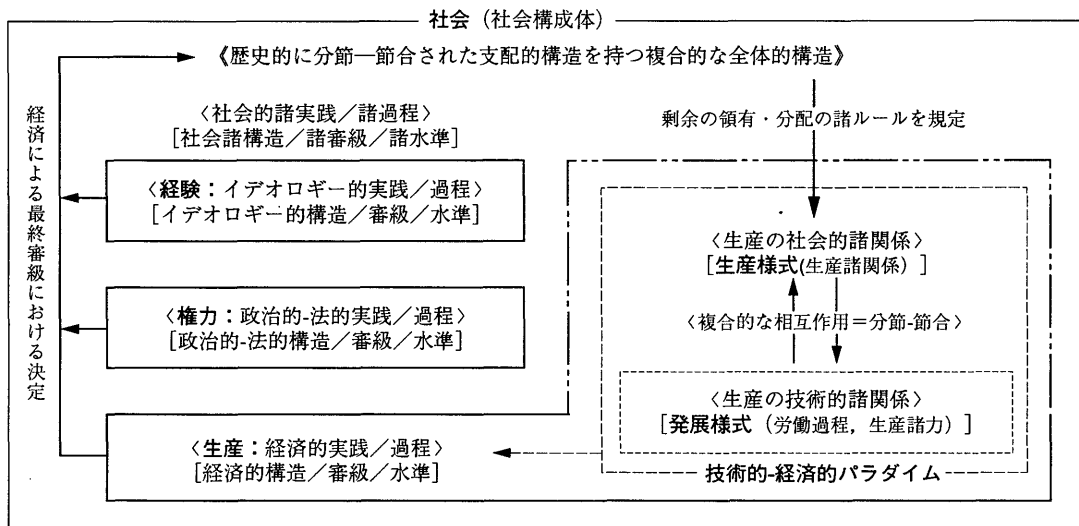
資本主義的社会構成体の場合には、当然のことながら支配的な構造は経済であることから、経済は一支配的構造であることと支配的な構造を決定することの一二重の意味で社会において最も重要な位置を占めているのである。これらのことから、社会(社会構成体)は、「支配的なものをもつ構造化された複合的全体」であり、この「全体の構造は、階層化された有機的全体の構造(la structure d'un tout organique hiérarchisé)として分節-節合される。全体における諸分節と諸関係の共存は、諸分節と諸関係の分節-節合(Gliederung)のなかに種差的な秩序を導入する支配的構造の秩序に服」(Althusser et Balibar, 1968a, p. 122)している。

経済構造は一義的に上部構造(政治的-法的構造とイデオロギー的構造)を、社会全体を規定・決定するのではない。カステル自身の言葉を引くならば、「生産諸様式は歴史的必然の結果

11) 分節-節合(articulation/gliederung)という用語は、単なる複数の要素の寄せ集めや組み合わせ(combinatoire)ではなく、複数の異質的要素、諸分節を結合(combination/verbindung)することによってある全体的な統一性(unité)を構成する、といったニュアンスを含んだアルチュセール派構造主義の議論において最も重要な用語の一つである。このように構成された「全体の構造、統一性」は、その要素が等質的でないがゆえに、単純な要素に還元することができない。もし「複雑なもの」が単純な要素に還元できるのであれば、その種の「複雑さ」とは、単純な諸要素の集まり、組み合わせ(combinatoire)にすぎず、複数性を言い換えているにすぎない。したがって、分節-節合によって構成される全体的構造とは、異質的な諸審級・諸水準を結合(combination)した真の「複合的全体の構造」である。(Althusser et Balibar, 1968a, 1968b; 今村, 1997, p. 159)。

12) 今村(1997)によると、マルクスは社会構造のなかで働く複数の作用を裁判制度の訴訟過程にたとえており、ドイツ語のプロツェス(Prozeß)には、本来、裁判訴訟過程と化学反応過程の意味があるが、これを単純にフランス語の「過程processus」と訳してしまうとマルクスが意図していたであろう元々の訴訟の意味が消えてしまう。アルチュセールがこれらを「審級instance」と訳したのは、マルクスが意図したであろう経済、政治、イデオロギーなどを、最高裁、高裁、地裁といった控訴の過程として捉え、下級審で決着がつかないものは、控訴が行われ、最終的には最終審(dernière instance)である経済的-下部構造において結審が行われる過程として理解すべきであると考えたからだとしている(今村, 1997, p. 156)。

図 I 社会構造, 生産様式, 発展様式 (社会を構成する諸構造間の分節-節合)



(出所) Castells, 1983b, pp. 305-31, 1989, pp. 7-12 をもとに筆者作成

として現れるのではない。それは歴史的敵対者の打倒, 社会的同盟の構築, そのヘゲモニーを確立するための援助を獲得することで政治的, そしてしばしば軍事的に支配者となった社会的階級の出現という歴史的な諸過程の結果」(Castells, 1989, p. 9) なのである。

経済による「最終審級における決定」は, 決して経済決定論(還元論)のように直接的・可視的なかたちで作用することはない。それは, 不可視的で迂回経路を通して間接的に効果を及ぼすのであって, 問題はそれがどのようにして, どのようなルールにしたがって働くのかである。したがって明らかにすべきなのは, この「全体の構造」のなかにある「異なった『諸水準』または諸審級の間に存在する効果〔作用, 決定〕の階層 (la hiérarchie de l'efficace)」、[従属的な諸構造とその要素に対する支配的構造の効果の階層」(Althusser et Balibar, 1968a, p. 123) である。それは複合状況という共時態的な「現

在の構造」のなかでの諸分節の共存, すなわち社会の諸分節が不均等な影響力をもちながら(階層的に)結合(分節-節合)されるあり方であり, 他の諸構造に対する一つの構造の支配というこの効果・作用・決定の階層性, すなわち諸水準・諸審級(諸矛盾)の重層的決定 (sur-determination) のあり方なのである (Althusser et Balibar, 1968a, pp. 112-149)。

各々が固有の運動の法則・リズムを持つ諸構造は, ある特定の複合状況において, 特定の場所・空間において相互に規定しあい特定の全体的文脈のなかでの相互の位置を決定=限定しあう (délimite)。このような水平的相互決定と同時に, これらは垂直的に経済による「最終審級における決定」によって各構造が選択(変動)しうる活動の範囲が限定されつつ, 異質な諸構造がひとつの統一体として結合 (combination/verbindung) される (今村, 1997, p. 154-158)。それゆえアルチュセールの言葉を用いるならば

社会は「複合的に—構造的に—不均等に……重層的に決定」(Althusser, 1968, p. 215)されるのである。

経済以外の諸構造は、経済構造による審判を経て、つまり経済構造の基本的諸法則を満たした上でのみその独自性を、その相対的自律性を獲得する。それゆえ経済の構造的優位性ゆえに社会全体は、経済のロジックに沿って、またそれを基礎として組織化されるという意味で、経済は全ての諸構造の母型＝マトリックス(matrice/matrix)をなしている。そしてそれは、同時に、その生産様式の諸構造(諸審級)の間で維持されている分節—節合の特殊な形態を、社会の諸要素が不均等な影響力・決定力をもって結合されているあり方をも示すものとなる(Poulantzas, 1968, 訳 p. 7)。

本章で素描してきたカステルの社会構造の概念を理解する鍵は、社会を一つの複合的で重層的な決定過程として考えることにある。「構造」という用語の一般的なイメージは、なにかしら静態的でリジッドなものを想起させるが、アルチュセール派構造主義における「構造」はそのようなものではない。それは何よりもまず「関係」であり、この構造はなんらかの具体的な社会的実体を持つものでもない。なぜなら、生産様式等の構造と社会構成体との厳格な区別に示されるように、現実の具体的世界にあるのは社会構成体であり、また社会的実践(過程)だけだからである。「実践」概念の転換は、人間を「構造」の担い手として、それゆえ社会的「実践」を客観的な社会的「過程」として把握することを可能にした。それゆえ構造は、具体的現実においては社会構成体を通じてしか、社会的実践を媒介としてしか存在しえない(Balibar, 1974, 訳 pp. 254-277)。したがって社会「構造」は、階層

的な(不均等な)効果・作用をもった諸過程の複合的統一として現れるのである。

IV 都市的—地域的過程と都市的—地域的構造

それではつぎに、このようにして規定されたカステルの社会構造の分析の枠組みのなかにおいて、空間構造はどのように位置づけられるのであろうか?先に規定されたように空間的—物質形態としての空間は社会的実践・構造に不可欠な物的支持であり、現実に存在する社会は空間化された状態でしか存在しえない。それゆえ現実の社会構造は、そのまま空間構造となる。ある特定の空間的—物質形態に社会的な意味・内容(＝構造的役割)を割り当て、ある特定の社会的諸形態と空間的—物質形態を結びつけるのはこの空間構造である。

しかしながら、このままでは、空間の理論は社会構造の理論の特殊化・拡張であると規定したにもかかわらず、この空間構造の理論は空間を分析要素として含まない社会構造の一般理論との差異を見出しがたいものになってしまう。先に見たように社会的意味を割り当てられた物理的・生態学的な環境である空間的—物的形態は、その社会的内容を持って社会構造に影響を与える源泉となりえる。つまり空間的—物質形態の転換は、そこに割り当てられる社会的内容の変更を導き、それが要因となって社会構造の転換を生じせしめる可能性を有している。このような社会に対する空間独自の作用を捉えるためにカステルが導入したのが、都市的システム(système urbain/urban system)あるいは都市的—地域的システム(urban-regional system)という分析的概念である(Castells, 1977, pp. 296-299, 1989, p. 5)。

まず、特定の空間的・物質形態と結びついた社会構造の諸要素（＝諸過程・諸実践）はイデオロギー的空間、制度的・政治的・法的空間、経済的（生産、流通、消費＝労働力再生産）空間といったかたちでそれぞれの空間を構成しているが、そのような諸過程は、社会構造の総体のなかで分節・節合されている。都市的システム、あるいは都市的・地域的システムとは、ある空間的諸単位・統一体（unité）における、そのような諸過程の種差的な分節・節合であり、「このような諸過程の（空間的）諸単位において、社会構造の諸要素の結合における特定の諸効果を生み出す」（Castells, 1977, p. 298）ものである。それは社会構造と、そのなかに存在する空間的単位としての下位総体との間に確立された相互作用、すなわち分節・節合によって生じる、ある空間的単位の歴史的に規定された効果のことである。カステルが言うところの「都市的・地域的諸単位」は、「もっぱら場所（lieux）としてではなく、……社会構造に対する種差的な諸効果の起源」（Castells, 1977, p. 298）として考えられている。

それゆえ都市的システム、あるいは都市的・地域的システムとは、空間分析のために特殊化・拡張された社会構造であり、空間的な効果・決定の階層性を明らかにするためにより具体的に展開された空間構造であると言えよう。実際、カステルの具体的な空間分析においては、空間構造は、すべてこの都市的・地域的システムのレベルを前提として展開されており、その意味で本稿では、つぎに論じる「都市的・地域的過程」との用語上の対比からも、以降、これを「都市的・地域的構造」との用語を用いることにしたい。

ここで注意しなければならないのは、こうし

た都市的・地域的構造は、決して矛盾のない安定的なものでも固定的でもないことである。弁証法的分析は、全ての構造を絶え間ない変化にさらされているものとして理解し、全ての構造は、多かれ少なかれ結晶化されているが、常に変革の過程にある矛盾的で紛争的な社会的諸関係の総体として捉える。社会的行為者は、日々、彼らの社会の諸ルールを生産あるいは再生産し、そのような諸ルールを社会の空間的表現とに転換するが、そのような諸行為は矛盾と紛争に満ちたものである（Castells, 1977, p. 500, 1983b, p. xvi）。確かに社会的諸実践・諸過程は、価値観、欲望、願望といった純粋な主体的事柄ではなく、生産諸力や生産諸関係によって構造的に決定されるものであるが、先にも述べたように現実的・具体的な都市的・地域的過程（たとえば、社会における都市の役割の歴史的定義）のレベルにおいては、事柄は、歴史的・社会的諸主体が、それをめぐって闘争する特定の既存の都市的・地域的構造（たとえば、具体的な社会計画や都市計画）が問題となる（Castells, 1983b, p. 71）。

それゆえカステルの空間分析における根本的な問題は、「構造的に規定された行為者は、彼らの紛争、支配、同盟、妥協を通じて都市の生産と再生産〔＝構造の生産と再生産〕をどのように行うのか？我々が社会的闘争と社会的交渉の結果として見る都市化の過程において空間的諸形態、経済的諸機能、政治的諸制度、文化的意味はどのようにして結合されるのか？階級、性、人種、少数民族の起源、文化的伝統、地理的な立地は、どのようにして都市的意味において介入する社会的行為者の形成に貢献するのか？」（Castells, 1983b, p. xviii）ということになる¹³⁾。

したがって、空間を分析する上で、社会的変

化を説明する上で最も重要なことは、このような構造と過程の分析を統合＝分節－節合することにある。なぜなら、「人々と国家を、経済と社会を、都市と市民を」、つまりは構造と過程の分析を分離することからは「個人的な諸経験から切り離された諸都市的システム、行為者なき構造〔＝主体なき構造〕、構造なき行為者〔＝構造なき主体〕、市民なき都市、都市なき市民が残される」(1983b, p. xvi) からである。

図IIは、このような構造と過程の関係、分節－節合のあり方を図式化したものである。カステルの分析の枠組みにおいては、過程は、それぞれの構造の分析レベルに対応する三つのレベルから把握されていると考えられる。まず第一のレベルの過程は、ある一つの構造＝審級によって規定され、また同時にその構造を再生産するものである。このレベルにおける構造も一つかそれ以上の矛盾をはらんでおり、この構造によ

って規定される過程もまた矛盾したものとなっている。

第二のレベルの過程は、複数の諸構造＝諸審級が分節－節合された複合的な社会システムによって規定された複合的な諸過程である。このレベルにおいて各々の諸構造は相対的自律性を有し、独自の運動法則・リズムにしたがって発展するが、その発展速度の差異は諸構造間の不均等発展を導き、ある時点ではある程度の整合性を持って分節－接合されていた諸構造の間でのズレ (décalage) を必然化する。このような過程の進行は、各々の構造内における矛盾の激化、あるいは諸構造間の齟齬から生じる諸矛盾の先鋭化に帰結し、このような多様な方向性を持つ諸矛盾はある歴史的な複合状況において凝結 (condensation) し融合 (fusion) することで、社会転換の諸力として発現する¹⁴⁾ (Althusser, 1968, pp. 86-128)。

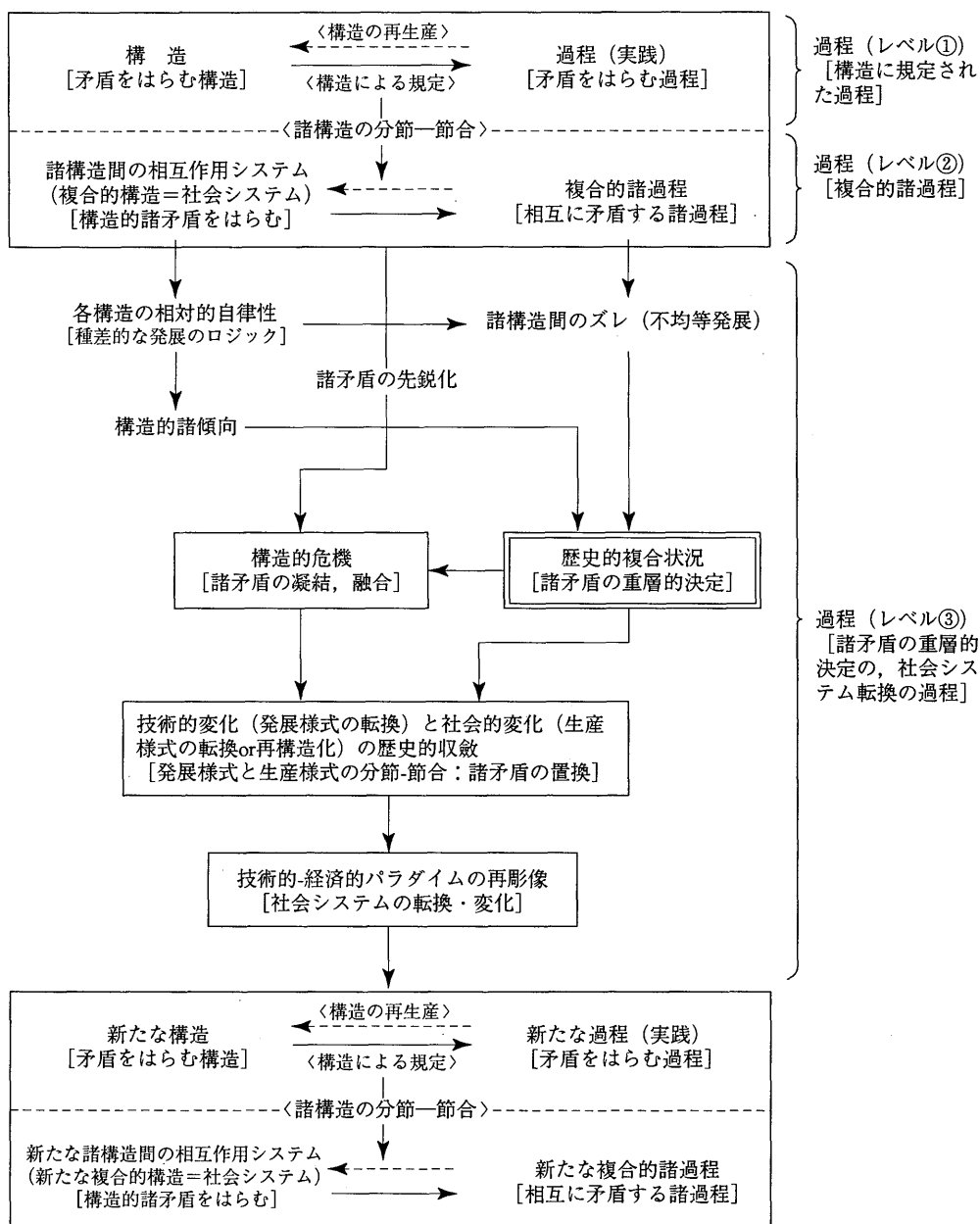
13) 吉原直樹氏 (1994) や幾人かの論者が言うようなカステルの理論における「構造決定論と主体論の対立」の問題は、アルチュセール派構造主義としてのカステルの分析の枠組みではそもそも成立しえない問いである。広く誤解されているようだが、アルチュセールの構造主義的議論には「主体」が存在しないのではない。むしろ逆に、「構造」はその機能の「担い手」としての「主体」が存在しなければ成立しないがゆえに、「構造」は「主体」を不可欠の要素とし、それを創出するのである。ただし、ここで言う「主体」とは、先にも述べられた「実践」概念の転換によって解体された後の「主体」であり、そのような「主体」は、人間を社会的諸階級に分配する「構造」のなかで種差的位置を占めるかぎりにおいてのみ、社会科学的分析において意味をもつものである。

このような観点からアルチュセールは、新古典派経済学のような「構造なき主体」と同時に「主体 (担い手) なき構造」、つまりレヴィ＝ストロースの構造主義をも批判し、これらを退けている。そしてこの構造が成立するために必要不可欠な主体形成を行うのが経験、つまりイデオロギー的構造である (今村, 1997, pp. 262-275)。なおイデオロギー的構造がどの様に「主体」の形成を行うのかについての詳しい議論はアルチュセール (1970, pp. 21-36) を参照のこと。

14) 「凝結」、「融合」、「置換」とは、フロイトの精神分析学からアルチュセールが流用した諸矛盾の重層的決定のあり方の違いを示すための用語である。「諸矛盾」の幾つかは、根本的に異質であり、すべてが同じ起源、同じ方向、同じ水準、同じ場所 (lieu) を持つとは限らない。しかしながら、そのような諸矛盾は、一定の「現時点 moment actuel」において集積し、「融合」されて現実的・現勢的な一つの統一された破壊力となる。「複合状況」とは、この「現時点」における「全体の構造の諸分節間における相互的な実在諸条件の複合的な関係」(Althusser, 1968, p. 213)、つまり全体としての「現在性の構造」における効果を指す用語であるが、諸矛盾 (諸実践) が、一定の複合状況において複合的全体をなすか、どのような形で分節－節合されているかを示すのが凝結、融合、置換の諸用語である。

諸矛盾は融合ないし凝結の状態でも重層的に決定されていれば、対立物が互いに敵対し、多様な方向を持つ諸矛盾が集積されて革命的諸力として爆発するが、置換の状態でも重層的に決定されていれば、敵対しあわない。それゆえ置換とは、一定の状況において、対立物が他の対立物の位置へ移ること、主要な矛盾と副次的な矛盾とが、矛盾の主要な側面と副次的な側面とがその役割を交換し諸矛盾が相互浸透することであるとされている (Althusser, 1968, pp. 86-128, pp. 162-224)。

図II 構造と過程の関係=分節-節合



(出所) Althusser, 1968, pp.86-128 ; Castells, 1989, pp.1-32をもとに筆者作成

そして、構造的な危機が発展様式と生産様式の諸変化の歴史的収斂を作り出す時、社会変革の契機としての諸転換のマトリックスの形成＝技術的－経済的パラダイムの再彫像 (reshaping) がなされることになる。それゆえ第三のレベルの過程とは、このようにして新たな構造、過程が創出される再構造化の、諸矛盾の凝結・融合を導く重層的決定の、社会システムの転換の過程であると言えよう。このようにして主要な矛盾を置換 (déplacement) することで構造的危機は乗り越えられる (止揚される) が、それは決して全ての矛盾が解消されるわけではなく、それが内包する新たな諸矛盾は次なる構造的危機を準備していくことになる (Castells, 1989, pp. 1-32)。

カステルによる構造と過程の分節－節合、つまりは効果・決定の階層性をより具体的な空間分析の枠組みである都市的－地域的過程と都市的－地域的構造の点から整理したものが図IIIである。社会は「彼ら自身の社会的諸利害にしたがって社会的組織の基本的諸ルールをめぐって互いに対立する社会的諸階級において構造化される、紛争的実在である」(Castells, 1983b, p. 302) ことから、特定の空間的－物質形態に構造的な役割＝意味を割り当てる都市的－地域的な意味の定義の過程は、単なる都市的－地域的構造の再生産の空間的表現ではなく、「直接的に社会的闘争のダイナミックスにリンクする紛争、支配、支配に対する抗議の過程となる」(Castells, 1983b, p. 302)。

カステルは、特定の空間的－物質形態に割り当てられた既存の意味が変革される、つまりは新たな都市的－地域的構造が都市的－地域的過程＝実践によって創出される再構造化の過程には、四つのものが存在するとしている。一つ目

は、制度的権力を持つ支配階級による地域的再構造化の過程であり、二つ目は被支配階級による部分的、あるいは全般的な革命の過程、三つ目は社会運動によるもの、そして四つ目は都市社会運動によるものであるとしている (Castells, 1983b, pp. 304-305)。

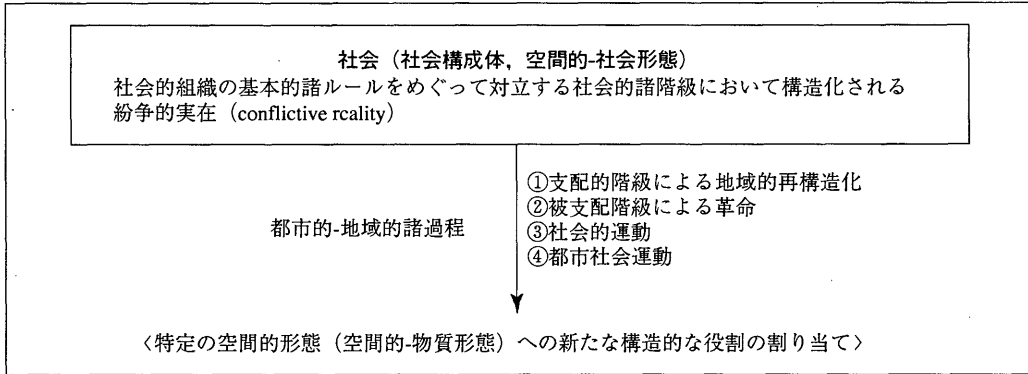
そしてこのようにして規定された都市的－地域的構造が、特定の空間的－物的形態に構造的な役割を割り当てることを通じて都市的－地域的過程が規定されることになる。カステルの定義によれば「都市〔空間〕の意味 (urban〔spatial〕 meaning)」とは、「所与の社会において歴史的諸行為者間での紛争的過程によって、一般に諸都市〔空間〕に (そして都市間分業において特定の都市に) 目的として割り当てられた構造的な役割 (performance)」であり、「その歴史的に規定された都市的〔空間的〕意味によって各都市〔空間〕に割り当てられた諸目的を遂行することを目的とした組織的諸手段の分節－節合されたシステム」が「都市的〔空間的〕諸機能 (urban〔spatial〕 functions)」である。そして、この都市的 (空間的) 諸機能が、構造の再生産という観点から捉えられた「都市的〔空間的〕諸過程」に他ならない (Castells, 1983b, p. 303)。

ついで、この都市的意味と都市的諸機能は、それらの結果として物象化された諸過程の象徴的な空間的表現である「都市的〔空間的〕諸形態 (urban〔spatial〕 forms)」を規定する。これは「常に歴史的な諸行為者間の矛盾的過程によって決定される都市的意味の、そして都市的諸意味 (とそれらの諸形態) の歴史的な重焼付け (superimposition) の、象徴的な表現」であり、これらは具体的な物理的景観を構成し、都市的 (空間的) 意味と都市的 (空間的) 諸機能に対して物理的な基盤・支持を提供する (Cas-

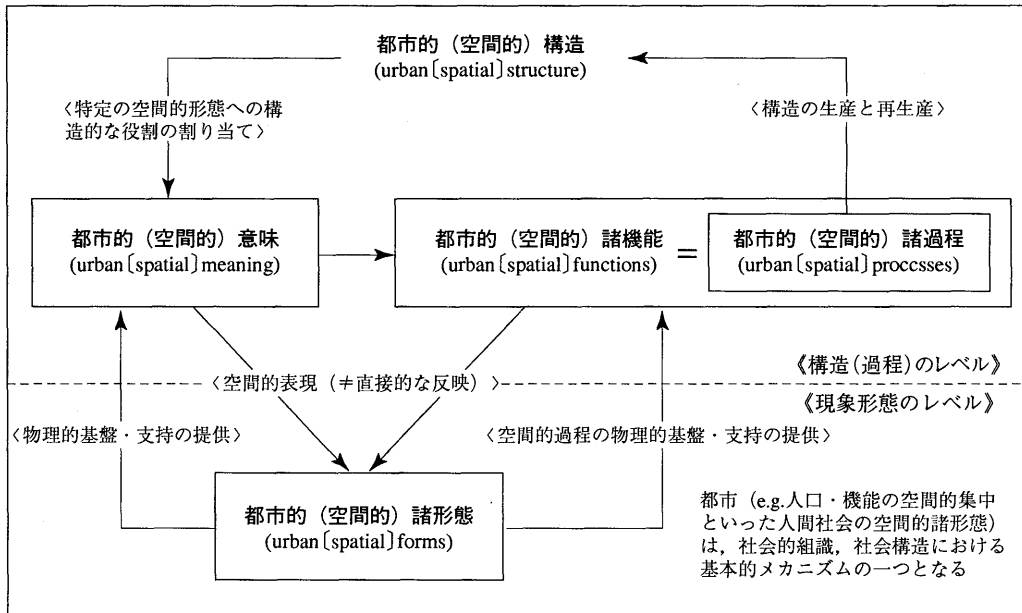
社会構造と空間構造

図III 都市的意味，都市的諸機能，空間的諸形態間の関係と決定の階層性

過程→構造：再構造化の過程（諸実践・諸過程の構造化の過程）



構造→過程（機能）：構造によって規定された過程（過程による構造の再生産）



（出所）Castells, 1983b, pp. 291-315 をもとに筆者作成

tells, 1983b, p. 303)。ここにおいて空間は、社会にとっての根本的必要条件、基本的メカニズムの一つとなり、社会的組織、社会構造に対して独自の効果を持つことになるのである。

したがって、この都市的—地域的意味の定義の過程は、単なる社会や文化の空間化されたコピーでもなければ、いわゆる階級間闘争の空間的結果でもない。カステルは、そのような見方は、空間と社会の分析を分離するものであり、それゆえ「都市紛争の階級闘争への同化も、社会変化の両方〔社会的変化と都市的・空間的变化〕の諸過程の完全な独立もどちらも維持することはできない」(Castells, 1983b, p. 68) とする。

こうした「諸階級と諸都市との間の決定の階層性 (hierarchy of determination)」, つまりは社会と空間の間の、構造と過程の間の分節—節合の様態は、歴史的に規定された各々の社会構成体によって多様であり、それが具体的にどのようなものになるのかは現実の実証研究を通じて明らかにすべきものである (Castells, 1983b, p. 68)。ここでカステルが提示しているものは、そのような具体的現実を認識するための分析の枠組み、分析のために必要不可欠な最小限の理論的ツールなのである。そして、この理論的ツールは、絶えず継続的に現実の歴史的現象の

分析に適用していくことによって、その現象についての新たな知識を創出しようか否かによってのみ、その有効性を検証しようのである¹⁵⁾ (Castells, 1977, p. 153, 1983b, p. xx)。

V 結論

本稿では、アルチュセール派構造主義との具体的な関連性を明らかにしながら既存の諸研究では、十分なかたちでは取り上げられてこなかったカステルの都市・空間理論におけるその分析の枠組みそのものを抽出し再構成することを試みた。その際にカステルの都市・空間理論には初期から近年の著作までである程度一貫した分析の枠組みが存在し、それはまたアルチュセール派構造主義を依然として基盤とするものである、というのが筆者の仮説であった。

カステルがその理論的立場を大きく転換したとする既存の諸研究は、初期の著書である『都市問題』時点での理論構築を重んじる研究スタイルから、実証諸研究を重視する近年の研究スタイルへの転換とカステル自身の自己批判をその論拠として重く見ている (Castells, 1977, pp. 483-523, 1983b, p. 298; Saunders, 1986; 高橋, 1993)。しかし、この理論構築から実証研究へという研究スタイルの転換は、アルチュセール派構造主義との断絶ではなく、理論的形式主義、理論偏重主義 (Théoricisme) との断絶であった、というのが筆者の考えである。カステルの自らの初期の研究スタイルに対する自己批判を注意深く読めば、それが確認できるであろう。

カステルの自己批判の具体的な内容は、先にも述べたように都市・空間に関する社会科学的な研究の理論化を急ぐあまり、実証分析に使えないほど極端に公式化・形式化された理論を生み

15) カステルは、初期の自らの著作に対する自己批判という文脈のなかで次のように述べている。「社会科学に関して理論の決定的に重要な検証は、その整合性というよりは、その有効性 (adequacy) にある。有効性とは、所与の現象についての新たな知識を創出するための一連の知的な道具の能力を意味する。ガシュトン・バジュラルの教えにしたがって、我々は最も有効な諸概念とは、知識の道具としてそれらを使用する過程において変形させ改めるに十分な柔軟性を備えたものであると考える。理論の果実の現実的な検証は、包括的なパラダイムにおいて経験を再コード化する終わりなき運動ではなく、社会的な諸過程と諸状況を理解することを我々に可能にさせるこの能力なのである」(Castells, 1983b, p. xx)。

出し、その意味で理論的な形式主義に陥ってしまっていた、とするものである (Castells, 1977, pp. 484-485)。したがって、もしこの点を捉えて構造派的傾向の後退の論拠としているのであれば、それは理論的形式主義とアルチュセール派構造主義とを混同する議論であり、アルチュセール派構造主義に対する理解の不十分さを示すものでしかないだろう。

確かに、『都市とグラスルーツ』以降のカステルは、理論的に多くのものを依拠しているプーランツァスの自己批判を受けて (Poulantzas, 1978, pp. 11-30)、各構造の独立性・自律性を無条件に指定してしまうような用語(「審級」や「最終審級における決定」)の使用を避け、「構造」よりもむしろ「過程」という用語を多用するようになっていく。

しかし本稿で検討したように、その分析の枠組みにおける構造と過程(あるいは実践)は、決して一方に「構造」、他方に「過程(実践)」といったように対置され対立するような概念ではない。したがって単なる用語の共通性ではなく、その分析の枠組みにまで立ち返って見るならば、その都市・空間理論のなかに一貫したかたちでのアルチュセール派構造主義に基づく理論構成を見出すことが可能であると思われる。

このようなアルチュセール派構造主義を介したカステルの都市・空間分析の枠組みの再構成がそもそも妥当であるかどうかは、これを用いることで、その都市・空間理論体系に対するより深い理解をえることが可能であるのかどうかの検討がされねばならないだろう。1980年代に入ってからのカステルは、新たなテーマの下に真に革新的な都市・空間理論を展開しようとしているが、それを理解するためには、またそれらの新しい諸研究をカステルの理論体系のなか

に位置づけるためには、是非ともこのような彼の分析枠組みを再構成しておく作業が必要であった。この80年代以降の研究の詳細な検討については、次稿で改めて論じる予定である。

文 献

- [1] Althusser, L., *Pour Marx*, Paris, Maspero, 1968. (河野健二・田村俊・西川長夫訳『マルクスのために』, 平凡社, 1994年)
- [2] Althusser, L. et Balibar, É., *Lire le Capital (nouvelle édition) I*, Paris, Maspero, 1968a. (権寧・神戸仁彦訳『資本論を読む』, 合同出版, 1982年)
- [3] Althusser, L. et Balibar, É., *Lire le Capital (nouvelle édition) II*, Paris, Maspero, 1968b. (権寧・神戸仁彦訳『資本論を読む』, 合同出版, 1982年)
- [4] Althusser, L., "Idéologie et Appareils Idéologiques d'Etat—notes pour une recherche—," *La Pensée*, No. 151, 1970. (西川長夫訳「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」[西川長夫編訳『国家とイデオロギー』, 福村出版, 1975年])
- [5] Balibar, É., *Cinq Études du Matérialisme Historique*, Paris, Maspero, 1974. (今村仁司訳『史的唯物論研究』, 新評論, 1979年)
- [6] Castells, M., "Y a-t-il Une Sociologie Urbaine?" *Sociologie du Travail*, Vol. 10, 1968. (山田操・吉原直樹・鯉坂学訳「都市社会学は存在するか」[ピックバンズ, C. G.編『都市社会学—新しい理論的展望—』, 恒星社厚生閣, 1982年])
- [7] Castells, M., "Theory and Ideology in Urban Sociology." (ed) Pickvance, C. G., *Urban Sociology: Critical Essays*, Tavistock Publications, 1976a. (山田操・吉原直樹・鯉坂学訳「都市社会学における理論とイデオロギー」[ピックバンズ, C. G.編『都市社会学—新しい理論的展望—』, 恒星社厚生閣, 1982年])
- [8] Castells, M., "Theoretical Propositions for an Experimental Study of Urban Social Movements." (ed) Pickvance, C. G., *Urban Sociology: Critical Essays*, Tavistock Publications, 1976. (山田操・吉原直樹・鯉坂学訳「都市社会運動の実証的研究のための理論的提案」[ピックバンズ, C. G.編『都市社会学—新しい理論的展望—』, 恒星社厚生閣, 1982年])

- [9] Castells, M., *La Question Urbaine (nouvelle édition)*, Paris, Maspero, 1977. (山田 操訳『都市問題—科学的理論と分析—』, 恒星社厚生閣, 1984年)
- [10] Castells, M., *City, Class and Power*, London, Macmillan Press, 1978. (石川淳志監訳『都市・階級・権力』, 法政大学出版局, 1989年)
- [11] Castells, M., "Crisis, Planning and the Quality of Life: Managing the New Historical Relationships between Space and Society," *Environment and Planning D: Society and Space*, Vol. 1, 1983 a.
- [12] Castells, M., *The City and the Grassroots: A Cross-Cultural Theory of Urban Social Movements*, Berkeley, University of California Press, 1983b.
- [13] Castells, M., "High technology, Economic Restructuring, and the Urban-Regional Process in the United States," (ed) Castells, M., *High Technology, Space, and Society*, London, Sage Publications, 1985.
- [14] Castells, M., *The Informational City; Information Technology, Economic Restructuring, and the Urban-Regional Process*, Cambridge, Blackwell Publishers, 1989.
- [15] Castells, M., *The Rise of the Network Society*, Cambridge, Blackwell Publishers, 1996.
- [16] Castells, M. and Henderson, J., "Techno-economic Restructuring, Socio-political Processes and Spatial Transformation: a Global Perspective," (ed) Castells, M. and Henderson, J., *Global Restructuring and Territorial Development*, London, Sage Publications, 1987.
- [17] Dunleavy, P., "Protest and Quiescence in Urban Politics: A Critique of some Pluralist and Structuralist Myths," *International Journal of Urban and Regional Research*, Vol. 1, 1977.
- [18] Friedman, J., "The World City Hypothesis," *Development and Change*, Vol. 17, 1986.
- [19] 今村仁司『アルチュセール—認識論的切斷』, 講談社, 1997年。
- [20] 川島哲郎「自然的生産諸力について—ウィットフォーゲル批判によせて—」『経済学年報』(大阪市立大学経済学会), 第2集, 1952年。
- [21] Leborgne, D., and Lipietz, A., "New Technologies, New Modes of Regulation: Some Spatial Implications," *Environment and Planning D: Society and Space*, Vol. 6, 1988.
- [22] Lowe, S., *Urban Social Movements: The City After Castells*, London, Macmillan, 1986. (山田 操・吉原直樹訳『都市社会運動—カステル以降の都市—』, 恒星社厚生閣, 1989年)
- [23] 松原 宏「マルクス主義都市理論の新潮流」『西南学院大学経済学論集』, 第23巻第2号, 1988年。
- [24] 松原 宏「都市経済地理学をめぐる理論の動向と課題」『人文地理』, 第42巻第4号, 1990年。
- [25] 松原 宏「フレキシブル生産システムと工業地理学の新展開—A. J. ScottのNew Industrial Spaces論を中心に—」『西南学院大学経済学論集』, 第29巻第4号, 1995年。
- [26] 西村 茂「フランスにおける都市社会学理論の展開—M. カステル, J. ロジキューヌの理論について—」『名古屋大学法政論集』, 85号, 1980年。
- [27] Piore, M. J. and Sabel, C. F., *The Second Industrial Divide: Possibilities for Prosperity*, New York, Basic Books, 1984. (山之内靖・永易浩一・石田あつみ訳『第二の産業分水嶺』, 筑摩書房, 1993年)
- [28] Poulantzas, N., *Pouvoir Politique et Classes Sociales*, Paris, Maspero, 1968. (田口富久治・山岸紘一訳『資本主義国家の構造 I・II—政治権力と社会階級—』, 未来社, 1978・1981年。
- [29] Poulantzas, N., *L'État, le Pouvoir, le Socialisme*, Presses Universitaires de France, 1978. (田中正人・柳内 隆訳『国家・権力・社会主義』, ユニテ, 1984年)
- [30] Sassen, S., *The Mobility of Labour and Capital*, Cambridge, Cambridge University Press, 1988. (森田桐郎訳『労働と資本の国際移動』, 岩波書店, 1992年)
- [31] Saunders, P., *Social Theory and Urban Question (2nd edition)*, London, Hutchinson, 1986.
- [32] Scott, A. J., *New Industrial Spaces: Flexible Production Organization and Regional Development in North America and Western Europe*, London, Pion, 1988.
- [33] 高橋早苗「マニユエル・カステルと『都市的なもの』—『都市の意味』の変容をめぐる—」(吉原直樹編著『都市の思想—空間論の再構成にむけて—』, 青木書店, 1993年。
- [34] Tickell, A. and Peck, J. A., "Accumulation, Regulation and The Geographies of Post-Fordism: Missing Links in Regulationist Research," *Progress in Human Geography*, Vol. 16 No. 2, 1992.
- [35] 友澤和夫「工業地理学における『フレキシビリティ』研究の展開」『地理科学』(広島大学), 第50巻第4号, 1995年。

- [36] 豆本一茂「都市システム研究の分析的枠組みに関する一考察」『経済論究』（九州大学大学院経済学会），第94号，1996年。
- [37] 山田鋭夫『レギュレーション・アプローチ—21世紀の経済学（増補新版）』，藤原書店，1994年。
- [38] 山本哲士『現代思想の方法—構造主義＝マルクス主義を超えて—』，筑摩書房，1997年。
- [39] 吉見俊哉「都市と都市化の社会学」（岩波講座・現代社会学18『都市と都市化の社会学』），岩波書店，1996年。
- [40] 吉原直樹・岩崎信彦編著『都市論のフロンティア』，有斐閣，1986年。
- [41] 吉原直樹『都市空間の社会理論—ニュー・アーバン・ソシオロジーの射程—』，東京大学出版会，1994年。
- *邦訳のある外国語文献についてとくに注記のない場合の本文中での引用は，筆者が原文から直接訳出し原文のページ数を記してある。したがって，その場合の引用文は必ずしも邦訳には正確に対応していない。